【2018年10月13日発行】
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター40号
http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

第17回全国大会（多摩大学開催）報告およびお礼

第17回全国大会実行委員長　安田 震一
（多摩大学）

2018年7月7日（土）～8日（日）、多摩大学グローバルスタディーズ学部（湘南キャンパス）において、日本国際文化学会の第17回全国大会を開催させていただきました。初日は129名、2日目は135名と、実に多くの方に参加していただくことができました。最終日の最後のセッションに至るまで熱気に溢れた会場の様子を拝見した時、ようやく本大会を成功裏に終えられたという感想を抱くことができました。

大会のテーマは「知の再武装－人は何をするべきか」とさせていただきました。本テーマには、多摩大学の寺島実郎学長が着目するジェロントロジー（社会工学的老年学）が背景にあります。すなわち、「100歳人生」が現実となった今、4年間の大学教育をもとに残りの人生をどのように生き抜くべきなのか。AI（人工知能）の発達が人間の仕事を減少させると認識したうえで、今後の人生や社会をいかに考えるのか。こうした問いは、日本以外の国や地域にとっても無縁ではありえません。私たちは「知の再武装」を通じて今後の人生や社会を構想する必要があります。こうした問いに向き合うのがジェロントロジーです。

多摩大学湘南キャンパスでは、3年前にも第14回全国大会を実施させていただきました。この時に続き、本大会においても、基調講演には寺島学長が登壇し、予定時間を遥かに超える講演を行いました。聴講者は140名を超え、講演後はパネルディスカッションが行われました。

後日談となりますが、講演時間を延長することは非常に稀な寺島学長にこの点を直接尋ねました。すると、学会および会員の皆様のレベルの高さを鑑み、どうしてもジェロントロジーについて伝えたかったとの返事がありました。また、他大学の学長方にも日本国際文化学会を推奨しているので、ぜひとも力を合わせて学術レベルを向上し、切磋琢磨してほしいとの願いを託されました。

今回の大会では、当初の予想を超える多くの会員が発表を希望され、9件の「自由論題」および6件の「共通論題」が行われました。それぞれの多彩な議論が今後の大会に反映できれば幸いです。

大会運営を支えてくれた多摩大学の学生

フォーラムには岩野会長、馬場副会長、木原副会長等が登壇し、ICCO資格認定を会員および学生に紹介しました。大学・大学院の参加申請方法や審査方法を解説することで、理解を広げ、関心を深め、より多くの大学に加盟していただきたいと願いつつ、本フォーラムを実施させていただきました。

今回の大会実施に当たっては、多くの本学部学生を巻き込むことができました。3年前はゼミ生がまだ少ない時期でしたが、現在はゼミ制度が定着した成果でもあります。学生たちは大会運営を通じて日本国際文化学会に触れ、ICCO認定資格に挑戦する機運も生まれました。また、一つのイベントを開催する難しさとやり遂げた充実感を通じて、人間的にも成長したと思います。

7月6日（金）のエクスカージョンは、「知の再武装」のアンチテーゼとして記念艦「三笠」を訪問しました。さらには、徳川の外交顧問としてのウィリアム・アダムスの足跡をたどりました。本件に関しては藤田事務局幹事の記事をご覧ください。

多摩大学グローバルスタディーズ学部（湘南キャンパス）における第17回全国大会を無事に終えることができましたことは、皆様の多大なるご協力と忍耐のお陰でございます。本学部の学生たちへの温かい励ましに対しましても、心より感謝申し上げます。

2018年度ICCO短期集中セミナーを沖縄・名桜大学で主催して

菅野 敦志　（名桜大学）

2018年8月26日から9月2日にかけての1週間、ICCO（文化交流創成コーディネーター資格）短期集中セミナーが開催されました。全体では第4回、沖縄では今年で2回目となる本セミナーですが、日程は昨年同様、前半を那覇市・沖縄県青年会館に宿泊してフィールドワーク、後半は名護市・名桜大学に移動して準備・発表会でした。参加者は24名でした。

初日は沖縄県青年会館で集合、オリエンテーションを開催しました。松居竜五ICCO資格事務局長の説明の後、小林文生顧問からの「沖縄と、あなたと、私」と題した基調講演がありました。フィールドワークを行うにあたり、「『あいだ』への視点」への気づきの重要性を提起する、非常に示唆に富む内容の講演でした。昨年のセミナー参加者で資格取得者の伊藤俊弥さん（名桜大卒、沖縄県警勤務）および筆者を含む教員5名（松居事務局長、岩野雅子会長、馬場孝副会長、加藤恵美審査委員）からのアドバイスが伝えられて終了し、懇親会会場に移動しました。懇親会では皆初対面とは思えないほどの盛り上がりを見せていました。

2日目は、午前中に加藤恵美審査委員から修了報告書の書き方についての詳細なレクチャーがありました。基礎調査やテーマのすり合わせを行った後、午後から各グループとテーマ設定に対する面談を、上記教員に倉真一常任理事を加えた教員7名で実施しました。

3日目から5日目の夕方にかけて、学生たちは朝から晩まで熱心にフィールドワークに取り組みました。特に印象深かったエピソードとしては、あるグループの相談を岩野会長、倉先生とともに受けていたその最中に、筆者の友人である桑江純子さん（人形劇団かじまやぁ代表）が青年会館のロビーに突如現れたことでした。名護在住の桑江さんとの那覇での偶然の出会い、そしてネイティブとしての桑江さんの口から語られる興味深い体験談の数々。これこそ、フィールドワークの醍醐味と面白さを感じさせる瞬間でした。桑江さんから別の方の紹介も受け、

松居事務局長の説明を聞きながら発表準備

名護市東江の海岸で名護湾を望む

「誰が民謡（うた）を唄うのか？」発表風景

名桜大学・北部生涯学習推進センターにて

悩んでいたグループの皆の顔が晴れやかになったのを見て、このプログラムが持つ不思議な力のようなものも感じました。

5日目の夕方、フィールドワークを終了して名護に向けて出発しました。名桜大学・北部生涯学習推進センター宿泊棟に荷物を下ろしてから、懇親会場（いこい）で本格的な沖縄料理を楽しみました。6日目は、終日北部生涯学習推進センターでの発表準備でしたが、学生たちは夕食後も再びPC室に戻り、夜遅くまで作業を続けていました。

最終日には、名桜大学講義棟で最終発表会が開催され、松居事務局長および岡真理子審査委員長、斉藤理委員、山脇千賀子委員、大和裕美子委員といった先生方が審査を担当してくださったほか、早稲田大学の渡辺愛子委員も貴重なコメントをしてくださりました。テーマも、琉球菓子、コザ、お茶、アカバナ、民謡、御嶽、紅型、むつみ橋通りなど多種多様で、どれも素晴らしい発表ぞろいでした。発表会終了後は、いこいで最後の懇親会を楽しみ、翌2日にセミナー全日程を終了しました。

2年目の沖縄セミナーの総括を一言で述べるならば、研究による自己研鑽を中心とする従来の学会組織にはない、新しい形の「共同（働）体」の姿をこのICCO資格および短期集中セミナーに見た、ということです。松居ICCO資格事務局長によるご尽力はもちろんのこと、馬場副会長が全日程を通してご協力くださったほか、岩野会長、倉常任理事、加藤審査委員も親身になって学生にアドバイスをしてくださいました。国際文化学は国境をこえる文化の接触と交流を対象としますが、本資格はまさに大学間の枠をこえる教員と学生の接触と交流から生まれる文化触変を生み出す仕組みそのものなのでしょう。この素晴らしい取り組みに関わることができたことを心から幸せに、そして誇りに思う次第です。

2019年度第18回全国大会に向けて

葉柳 和則　（長崎大学）

2019年度日本国際文学会第18回全国大会は長崎大学多文化社会学部が担当することになりました。本学部は2014年に設置された一学年の定員100人の小さな学部であり、日本国際文化学会とのつながりは山口県立大学で開催された第13回全国大会に始まったばかりです。新参者の本学部が全国大会を担当させていただくことになり、大変光栄であるとともに、身の引き締まる思いでもあります。

多文化社会学部は、グローバル化する世界を、社会科学から人文学までの越境的連携を通して、「多文化」という視点から解明し、それを教育へと、さらには社会へと還元していくことを目指して設置されました。「国際公共政策コース」、「社会動態コース」、「共生文化コース」、「言語コミュニケーションコース」、「オランダ特別コース」の5コースから成り、コースでの学びにおいて専門性を高めつつ、コースの壁を越えた学問的トランスボーダーを実現することを目指したカリキュラムとなっております。短期留学は必修、学生の35％前後が長期留学に参加という特徴とも相まって、国際文化学とは強い親和性を持つ学部であると自負しております。

「オランダ特別コース」という日本国内で唯一オランダの言語・文化・社会について系統的に学ぶことのできるコースを有していることに端的に表れているように、本学部は長崎という場所の歴史を背景にして誕生しました。強調するまでもなく、長崎は初期グローバリズムとも言いうる大航海時代の海上ネットワークの拡大の中で、16世紀に世界とのインターフェイスとして位置づけられることで歴史叙述の中に姿を現しました。ポルトガル、スペイン、イギリス、オランダとの貿易、キリスト教の布教と弾圧、鎖国体制における対外貿易港としての繁栄、潜伏キリシタンの存在、幕末・維新期の人間と情報の結節点としての機能、造船と石炭産業による近代化への貢献、そして原爆被災。このように、長崎の歴史もまた、一度は日本国際文化学会全国大会を開催すべき場所であることを示唆しているように思われます。

第18回大会のテーマ設定はもちろんのこと、エクスカージョンにおいても、長崎という場所の固有性を感じ取ることのできる大会運営をしていきたいと考えています。2020年の学会20周年に向けたステップとして、学会のさらなる発展に資する大会にしていく所存です。どうかご協力よろしくお願い申し上げます。

国立大学法人 長崎大学 NAGASAKI UNIVERSITY

次期全国大会
2019年7月6～7日　長崎大学
（5日にエクスカージョンを予定）

共通論題・自由論題の応募をお待ちしております。

【共通論題の募集】締め切りは2018年12月末（必着）
【自由論題の募集】締め切りは2019年3月末　（必着）

【共通論題１】文化触変論の適用可能性と理論的拡張の試み ――アフリカ、東南アジア、21世紀

馬場孝（代表）、松田素二、岡田建志、加藤裕治

多様な研究テーマへの自由な挑戦が可能であることが国際文化学の何よりの魅力であろう。しかし、対象とする現象を解明するうえで一定の「汎用性」を持つ「理論」「道具」の構築も意味のある作業ではなかろうか。平野健一郎が『国際文化論』等において提唱した「文化触変論」を様々な事例に適用し、必要に応じて修正や拡張を試みる。馬場によるこの企画趣旨と概要説明、各報告への問題提起に続き、専門分野と学問領域を異にする以下3名が報告を行った。

第1報告「アフリカにおける適用とモデル修正の試み」では、文化人類学（アフリカ研究）を専門とする松田が、文化人類学でのAcculturationモデル批判を概括し、平野「文化触変論」がその批判を乗り越える可能性を持つ点を議論した。ポイントは文化を「生きるための工夫」ととらえる平野の動態的・実践的文化観にあり、一例として、敵対的文化触変のアフリカへの適用の有効性が示された。他方、近現代のアフリカでは実践上も解釈上も「敵対的」とは多義的な内容を持たざるを得ない状況が説明され、モデルの現代的修正が示された。最後に、アフリカの正義回復過程での「対話型真実」に基づく社会観、人間観が提起され、モデリングの根底にある人間観、社会観を見据えての理論展開の必要性が強調された。

第2報告「近代ベトナムへの適用と分析」では、歴史学（ベトナム近代史）を専門とする岡田が、「生きるための工夫」にほかならない文字使用のベトナムでの変遷を、「漢越音」による漢字の使用開始、非漢越語表記の「チューノム」の発明、「漢字・チューノム交じり文」の普及と問題点、クオックグー（「国語」）という呼称によるローマ字表記法の普及と定着まで、文化触変論の概念や理論に照応させつつ報告した。クオックグーが「漢字チューノム交じり文」的な発想を継承している点の指摘は興味深く、最後に掲出された、ローマ字つづりのベトナム語が「漢字」に造形（デザイン）された正月祝いの句に、岡田報告の論点が集約的に示され、フロアの関心を集めた。

第3報告「21世紀の文化触変：理論的モデルの模索－日本のポピュラー（アニメ）文化受容を例として」では、社会学（メディア論）を専門とする加藤が、文化触変の理論モデルが21世紀の文化触変状況をどこまで説明できるのか、日本アニメの海外での受容を事例に報告を行った。ラッシュ・アーリと平野の21世紀状況の展望の比較後、20世紀のテレビ番組化による普及過程は文化触変のツーステップモデルにむしろ適合的である点が詳説された。一方、インターネットによる文化運搬の即時化は嗜好性を媒介とするバーチャルな共同体を生み、受け手の「フィルタ」は無化され送り手側に移動し、「選択」「抵抗」を代替する「反抵抗＝普及増進」過程を備える21世紀型の文化触変修正モデルが提示された。

フロアからは、Acculturation理論と一線を画する「文化触変論」の適切な英語表現、クールジャパンは「過剰呈示」ではなく「抵抗」ではないか、逆に、事例としての言及は不適切ではないか、松田のconviviality論及の意味、教育現場への具体的反映方法、進化論・生態学的モデルとの関連性などをめぐり、多数の貴重な質問、コメントをいただいた。これらを生かし、今後も議論の輪を広げ、深めていきたい。

【共通論題２】スポーツと国民意識の形成

鈴村祐輔（代表）、冨田幸祐、浜田幸絵

本パネルは、2017年に宮崎公立大学で行われた第16回全国大会第1日目の公開シンポジウム「〈1940年〉を起点に考える〈2020年の越え方〉」が提起したスポーツと政治の役割、あるいは国家間の問題にスポーツが果たす機能という視点を発展的に引き継ぐ形で行われた。具体的には、1930年から1940年に至る10年間に日本が主催した2つの国際的な競技会である第9回極東選手権競技大会（1930年）と紀元二千六百年奉祝東亜競技大会（1940年）、そして1940年の開催を目指しながら1938年に返上した第12回オリンピックを通し、スポーツと政治がいかに関わり、スポーツを通して日本の国民意識がどのように形成されたかを検討した。

共通論題2の報告者と論題は以下の通りであった。報告1：冨田幸祐（日本体育大学）「国際スポーツ大会と国旗－第9回極東選手権競技大会における英領インド代表旗問題に焦点を当てて」　報告2：鈴村裕輔（法政大学）「諸国民の祭典としての東亜競技大会」　報告3：浜田幸絵（島根大学）「『メディア・イベント』としての1940年東京五輪」（敬称略）

冨田報告では、1930年に開かれた第9回極東選手権競技大会に参加した英領インドの代表団が宿舎である日本青年館に植民地としてのインドの正式な旗である英領インド旗ではなく、インドの独立の象徴であったガンジー旗を掲揚したことで英国大使館が抗議し、英領イン

ド旗に差し替えられた問題を取り上げ、植民地における「国民意識」の形成と政治とスポーツとの関係が検討された。

鈴村報告では、1938年に「時局の進展」を理由に「東洋初のオリンピック」となるはずであった1940年のオリンピック東京大会の開催という名誉を失った日本が、中国大陸への進出を正当化するために提唱した「東亜新秩序」という概念の下で「東洋の盟主」としての日本の正統性を示すための大会として開催した紀元二千六百年奉祝東亜競技大会（1940年）を取り上げ、1936年のベルリンオリンピックを意識した大会のあり方と「東亜の新しい時代」を担う若人による大会という特徴から、東亜競技大会が「民族の祭典」と「若人の祭典」という性格を持った、日本による日本のための大会であったことを明らかにした。

浜田報告では、1940年の東京オリンピックを「マス・メディアによってイベント化された社会的事件」としての「メディア・イベント」と定義し、招致の段階ではオリンピックが「メディア・イベント」の性格を有していなかったものの、1936年のベルリン大会を契機に「メディア・イベント」となったことで日本国内においてオリンピックが「日本の技術的な優位性を世界に誇示する機会」と捉えられ、さらに大会そのものが日本の国際的な優位性を世界に伝える手段となったことが示された。

質疑応答でも参加者から重要な質問や指摘が行われ、本パネルは盛況のうちに終了した。パネルの円滑な進行に尽力された安田震一委員長をはじめとする大会実行委員会の協力とあわせて、謝意を表する次第である。

【共通論題３】「二重排除」を生きる「弱者」たち ――女性・高齢者をめぐる「排除」の文化・社会的構造の分析

相原征代（代表）、中山佳子、久保実希、吉岡剛彦（総評）

日本は現在、「格差社会」だと言われており、その抑圧構造の複雑さを「複合差別論」（上野千鶴子『差異の政治学』岩波書店、2002年）として論じていることもあるが、私たちの調査によって明らかになるのは、格差の拡大は、「差別」よりも「排除」のほうに問題があるのではないか、ということである。「差別」であれば社会構造内部の問題であるが、「排除」はその構造へのアクセスそのものの不可能性であり、タブーと結びついて文化的にその排除を正当化することもある。時には、社会的には問題がないとしても、排除されたものはタブーを犯した意識にさいなまれる。

相原報告における、育児や配偶者の都合で仕事を辞めざるを得なかった、あるいは仕事を継続するのに困難を感じていた女性のインタビューから明らかになるのは、夫婦間の地位の非対称性（女性の立場の劣位性）と、労働市場と家庭からの「二重の排除」に苦しむ女性である。「男性が一家の大黒柱」であるから、仕事と家庭の両立における決断を迫られるのは自分（妻）であるという構図は、「規範」として夫婦双方に深く内面化されている。日本社会においては「一家の大黒柱（夫）の労働市場」であるので、労働市場における女性の不利な状況と相まって女性を苦しめる。女性が仕事を継続することは、「社会から排除されること」ではないのに、「大黒柱のための労働市場」で「女性が働き続ける」という「タブー」によって、「仕事を継続する女性」と「家庭をおろそかにする女性」という「二重の排除」意識がもたらされるのである。このようなインタビュー結果から、社会問題を差別ではなく「排除」の観点からとらえなおし、「差別」問題で必要な「当事者からのクレイム（異議申し立て）」がなくても、排除されている人たちにどのような「アクセス」を提供できるか、という問題を提起できることを報告した。

中山報告では、さいたまゴールドシアター『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』を題材に、高齢者が高齢者を演じるということが何を意味するかについて分析した。本来の「老い」のありようと、演じられた「老い」とのズレは、時には笑いをもたらし、そのことから「老い」には身体的なものだけではなく、社会的に規定される部分があり、役者はその「社会的な部分」を過剰に演じるあまり、本来の「老い」とのずれが生じていると分析した。

久保発表では、「恋愛できない」と語る女性たちから「恋愛」は「だれでも経験し得る状態」ではなく，一種の「能力」となっていることを明らかにした。「外見の自己評価が低い（女性的価値の欠如）」と自分に思い込ませることによって、自分は恋愛に「向かない」体質だから、好きな男性を敢えて「推しメン（一番気に入っているアイドルのメンバー、恋愛というよりあこがれの対象）」にとどめおくなど、現代社会は「恋愛」さえも偏差値のように「能力」で測らせているのだ、と分析した。

吉岡の総評では、相原報告に対し、インタビューの対象が比較的富裕層に偏っており、たとえ労働市場から「排除」されていたとしてもそれほど問題でない場合が多く、本当の問題は「働かざるを得ない女性の排除」ではないかと問うた。中山報告に対しては、「うまい役者」とは「自分の属性ではないものを演じる」ことができる人であり、「老人が老人を演じる」というのは、そもそも「役者（演じる）」ではないのでは、とコメントした。久保報告には、もし「恋愛できない」原因が「自己評価の低さ（女性的価値の欠如）」にあるとして、その人たちをどのように「救う（治療）」ことができるのか、という問いを投げかけた。最後に、今までの「差別」議論の積み重ねからも示唆を得ながら、さらに今後は「クレイムすら言えない人々」の「排除」の問題も、視野に収めていくべきだろうと結論付けた。

【共通論題4】日本への留学生と彼らのその後 ——中国・韓国・台湾の比較の観点から

加藤恵美（代表）、金香男、野口真広、鄭成

本セッションでは、「東アジア知のプラットフォームの現状に関する研究（基盤研究（A）、17H00975）」の成果の一部が報告された。森川裕二会員の司会のもと、まず次の4つの報告が行われた。

第1報告「受け入れ側——日本の事例」（加藤恵美会員）では、科研費研究の全体像と本論題の目的、ならびに戦後の日本への留学生の歴史的概観が示された。科研費研究が全貌を明らかにしようとする「知のプラットフォーム」とは、知が東アジアでトランスナショナルに共有される場であり、その一方で本論題が留学生に焦点を絞るのは、そのような場が、留学を通じて形成された対面的なネットワークを基盤として創られるためだと説明された。また、東アジア諸国から日本への留学生には、その主要集団がエリート（国費留学生）から一般人（私費留学生）に移行したという特徴があり、今後の研究はそうした特徴を踏まえて行われなければならないことが指摘された。

第2報告「韓国の事例」（金香男会員）では、韓国では、1977年に国費留学制度が導入された後、1994年に高卒以上の留学が自由化、2000年には全ての留学が自由化されたことで、この30年間の間に海外留学が60倍に増加したことが示された。また、日韓間の学術交流は、韓国人留学生のネットワークに支えられており、その一例として、平野健一郎先生を受け入れ教員として1990年代前半に日本に留学した張寅性博士の活動が紹介された。その一方で、1990年代後半以降に増えた私費留学生については、「就職に勝つことが重要」と認識されていることも指摘された。

第3報告「台湾の事例（台湾留学生による政治・社会的なネットワーク形成に関する試論）」（野口真広会員）では、まず台湾では、1970年代の急速な経済発展の中で留学が自由化され、以降に海外留学が本格的に増大したことが示された。また、戦後台湾からの留日学生には、政治状況に強い影響を受けるという共通の特徴がありつつも、次のような世代ごとの特徴があり、それが「独立運動世代」から「研究世代」へ、そして「研究／東アジア言論活動世代」へと移行したものとして論じられた。最後に具体的事例として、1980年代に平野先生が受け入れた張啓雄博士の活動が紹介された。

第4報告「中国の事例」（鄭成会員）では、中国からの海外留学が、「救国の留学（19世紀末から20世紀前半）」、「国家主導の留学（1950年代から70年代）」、「多様化の時代（1980年代から現在）」として年代順に整理された。また、「多様化の時代」にあっても、中国政府は留学生を「国家建設の戦力」として期待し続ける一方で、中国からの留学生も韓国同様に「キャリアアップを優先する傾向がある」ために、帰国しないケースが多いことが指摘された。最後に、これまでの報告と同様に、具体的事例として、1980年代に平野先生が受け入れた李廷江博士がかかわる日中間の知的交流活動が紹介された。

その後、これらの4つの報告に基づき、論題参加者のあいだで質疑応答が行われた。会場からの質問は、「知のプラットフォーム」と留学生のネットワークとの関係に関する、研究全体を貫く理論（枠組み）の方に集中した。また、東アジア内部の敵対関係を助長し平和に貢献しないような「知のプラットフォーム」はありうるのか、というような、「知のプラットフォーム」の目的に関する重大な問題提起も受けた。このように本共通論題は、すべての参加者の実質的かつ積極的な参加により、有意義なものになった。

【共通論題5】グローバル化する原爆の記録 —「ヒロシマ・ナガサキ」の形成と展開

根本雅也（代表）、桐谷多恵子、楊小平、竹峰誠一郎、藤田賀久（ディスカッサント）

本パネルの目的は、広島と長崎に投下された原子爆弾の災禍というローカルな出来事がどのようにグローバル化されてきたのか、その展開と諸問題を議論することにあった。広島や長崎というローカルな地名が「ヒロシマ・ナガサキ」というアルファベットを意識したカタカナで表記されるように、原爆の災禍はしばしば国を超えた普遍的な次元に位置づけられ、グローバルな視点から語られる。そこで、本パネルでは「ヒロシマ・ナガサキ」がどのように語られ、何が行われてきたのかを歴史的に探るとともに、それが展開される過程において何が抜け落ちたのかについて報告者から問題提起を行った。

報告に先駆けて司会（根本）による趣旨説明が行われ、原爆の災禍に対する解釈の複数性とそれを取り巻くポリティクスの存在が説明された。「原爆がどこに落ちたのか」という問いに対して、「人類」「日本」「広島市」「長崎市」「個人」といった解釈の背後には、何を強調するのかとともに、何を強調しないのかという作為性があることが述べられた。

「あらためて〈わたし〉から『ヒロシマ・ナガサキ』を辿り直す試み—平和都市ヒロシマ／国際文化都市ナガサキの掛け声との間で」と題した桐谷の報告は、戦後の広島と長崎の「復興」がどのように語られ、進められてきたのかを説明する。一方で、桐谷は自身の調査経験にもとづいて被爆者とその家族の苦しみを明らかにし、「復興」

の陰では被爆者が抱えてきた負の側面が切り落とされてきたと指摘した。

「ヒロシマは国際化したのか—中国からのまなざし」と題した楊の報告は、中国における原爆の捉えられ方を検討するとともに、中国人の原爆被害者の存在に光をあてた。それを通じて、楊は、広島において語られる「ヒロシマの国際化」には日本によるアジア諸国の被害やその補償が抜け落ちていること、そしてそれゆえに記憶の和解が求められていることを指摘した。

「アメリカにおけるヒロシマ・ナガサキの『受容』」と題した根本の報告は、原爆投下国であるアメリカにおいて原爆が与えた被害の側面について言及し記念する行事を事例として検討した。それを通じて、アメリカにおいて「ヒロシマ・ナガサキ」が核兵器の被害として語られる一方で、それが起きた背景にあるはずの「日本とアメリカの戦争」という文脈が後景化されていると論じた。

「グローバル・ヒバクシャからみるヒロシマ・ナガサキ—被爆者からヒバクシャへ」と題した竹峰の報告は、日本国内における「被爆」と「被曝」の分離という問題を提起した。日本で「ヒロシマ・ナガサキ」が語られるとき、戦争という文脈が持ち出される。「ヒロシマ・ナガサキ」は世界的に知られ、グローバル化された側面を持つものの、その過程で日本では原爆による被害と他の核被害が切り離されてきた。それに対し、竹峰は真のグローバル化には、国境を超えた核被害をつなぐことが重要ではないかと議論した。

ディスカッサントである藤田は、広島・長崎の被爆というローカルの経験が普遍的な経験として人類に共有されようとしつつあることを肯定的に捉える一方で、そうした共有を阻むものについて言及し、共有の可能性や条件を問いかけた。

参加者は30名を超え、会場はイスが追加されるほど盛況となり、活発な議論が交わされた。

【共通論題６】日欧比較文化再考

松居竜五（代表）、シルヴァン・カルドネル、杉本バウエンス・ジェシカ、ミロシュ・デブナール

日本とヨーロッパの文化的な関係は、20世紀後半から21世紀に入って少しずつ変化の兆候が見られる。近代の日本文化はヨーロッパを比較対象としてアイデンティティを形成してきた面が強いが、近年ではそれは両者の鏡像的な関係へとシフトしつつある。全体として、グローバル化の中で相互の情報伝達の速度がより高まることで、これまで以上にインタラクティブで重層的な文化の影響関係が深まっているということが言えるだろう。

こうした見取り図に基づいて、この共通論題では松居竜五がコーディネーターとなり、龍谷大学国際学部に所属する三人のヨーロッパ出身の研究者が、それぞれの研究対象から、日欧の比較文化に関する観点を紹介した。

最初に松居が、十九世紀半ばの開国以降の日本とヨーロッパがどのような相互イメージを作ってきたかについてまとめた。特に松居は、開国から戦後にかけて強まった日本人の白人コンプレックスと、近年におけるその解消について指摘した。

次にシルヴァン・カルドネルが「沼正三『家畜人ヤプー』とその読解」と題して発表した。この中でカルドネルは、日本人という人種が白人のための家畜となるマゾヒスティックな未来世界を描いた沼正三の『家畜人ヤプー』(1956-1992)をYapou, bétail humain(Broché, 3vols. 2005-2007)として自らフランス語に翻訳・出版した体験について述べた。戦後の日本人による白人コンプレックスの極北とされてきた作品をフランス人読者が共有するという状況は、これまでの人種に関する一方的な視線とは異なるあり方と言えよう。杉本バウエンス・ジェシカは「ベルギーのBD(バンド・デシネ)における日本人イメージ」と題して発表をおこなった。この中で、杉本は、ベルギーのマンガ(bande dessinée)における日本人表象として、「ヨーコ・ツノ」(1978〜)シリーズなどの作品を取り上げた。現代の日本人が一種の憧れの対象として描かれるこの両作品は、ステレオタイプには収まりきらない日本イメージがヨーロッパにおいて模索され続けてきたことを示している。

最後にミロシュ・デブナールが「日本における白人移民の現在」と題して発表した。この中で、デブナールは、ホワイトネス・スタディーズの立場から、日本における白人移民の問題を提起した。デブナールの最近の著作Migration, Whiteness, and Cosmopolitanism, Europeans in Japan(Palgrave, 2016)は、現在の日本社会にヨーロッパ系の移民がどのように適応しているのかについて論じたものである。

これらの事例は、総体として、19世紀の帝国主義時代から第二次大戦を経て作り上げられてきた日欧文化の関係を再考する必要性を示唆している。議論の枠組みとしては、長年にわたって両者の関係を規定してきた一方的な人種観が後退し、文化コンテンツの重要性が増しているという方向が見られることが指摘できるだろう。その一方で、ヨーロッパから見た日本イメージは、十九世紀後半から現在に至るまで、意外に変わっていないという指摘もあった。この点において、移民問題や太平洋戦争、貿易摩擦によって翻弄されてきた日米関係の中で形作られたアメリカ人の日本イメージとは異なる面がヨーロッパに関しては見られると言えるようである。

【自由論題A】
戦争、反戦、テロリズム

桐谷多恵子（司会）、阿部碧、中野聡、大和裕美子、飯森明子

自由論題Aは、「戦争、反戦、テロリズム」というテーマで４報告が実施された。

第1報告「『焼かれた身体』と『焼いた身体』にまつわる受苦のイメージ――焼身行為における苦痛と原爆の苦痛の連関」（阿部碧会員）は、冷戦期、核兵器の脅威という危機的意識が社会にもたらした影響を、ヴェトナム反戦の意を表明して焼身したアリス・ハーズの「焼いた身体」をめぐる表象が哲学者である芝田進午を介して原爆の「焼かれた身体」と結びついた事例を中心に考察する研究であった。特に1983年にハーズ夫人記念平和基金の受賞を記念して翠山中学校が建立した碑に記されている碑文を一次史料として取り扱いながら、原爆の熱線で「焼かれた身体」とヴェトナム反戦という意思をもって「焼いた身体」という苦痛を媒介としたイメージの連関を探った。結論としては、ハーズ個人の苦痛の解釈　を通して、苦痛が個人の所有として喪失したと同時に、広く苦痛を媒介とした連帯への場を創造した、と分析した。

第2報告「グローバル授業で学ぶ「戦争」・「大規模暴力」・「記憶」・「和解」――Topics of Modern and Contemporary History における授業実践の経験から」（中野聡会員）は、これまでの報告者の研究成果や、科学研究費補助金プロジェクト「「アジア・太平洋戦争史」をめぐる研究教育プログラムの開発目的」と関連する教育実践から得た学びについて具体的経験を紹介するものであった。これらの実践から、研究と教育をむすびつけるコンテンツおよびペタゴジーの開発と共有・交流の必要性が指摘された。最後に、内外の若手研究教育者育成の場としてのグローバル授業の可能性と課題考察を行い、戦争・大規模暴力・記憶・和解をめぐる新世代による国際的な研究教育のプラットフォームにどのようにつなげていくか、などを今後の課題として指摘し、報告は締めくくられた。

第3報告者の大和裕美子会員は、「非核都市宣言をめぐる地方的展開――福岡県内の自治体を事例に」という題で報告を行った。1980年代において日本で非核宣言が急増した要因については、国際的・国内的な政治状況からその説明が試みられてきたが、よりローカルな文脈において、各地方自治体がどのように宣言発表に至ったのかについては、ほとんど光が当ててこられなかった。たとえば地方議会でどのような議論があったのか。そのような問題意識の下、非核都市宣言の発表をめぐって、地方自治体でいかなる議論がなされたのか検討し、当時の非核宣言運動の実態を探った。非核宣言は単に非核だけをねらいとしてその可決　が目指されたわけではなく、各地域の抱える諸問題を絡めとりうる政治的現象であった、と いう結論が印象的であった。

最後の報告「駐日外交団付通訳官とその日米交流ネットワーク ――「加藤冬作関係資料」を中心に」（飯森明子会員）では、太平洋戦争期を除く1908～64年まで、駐日米国大使館において通訳官を勤めた加藤冬作（1879-1970）が、日米交流ネットワークの一端を担っていたことを、近年確認された加藤氏個人所蔵の資料に基づき明らかにするものであった。本研究では、駐日米国大使館付陸軍武官 C. バーネット夫妻や駐日大使 J. グルーの米国人グループと、明治初めから1942年に没するまで日米関係に関心を持ち続けた枢密顧問官で初代日米協会会長を務めた金子堅太郎との接点について、前述の加藤氏の資料だけでなく、「金子堅太郎日記」など関係者による一次史料から検証した点も特徴的であった。加藤は単なる通訳の職務にとどまらず、戦前の日米交流ネットワークの重要な一端を担っていた通訳官であったと分析し、報告は締めくくられた。

【自由論題B】
異文化の理解と交流

斎川貴嗣（司会）、閻秋君、王媛、中川拓哉

本セッションでは、「異文化の理解と交流」と題して、3つの報告が行われた。

第1報告は、閻秋君会員（東北大学）「『観光紀遊』における岡千仞の清国認識の再検討」であり、明治期の漢学者岡千仞を日清間で文化要素を伝播させた文化運搬者として捉えた上で、日本から清国へと向けられた岡の清国認識を再検討した。そして、従来の研究において岡が清国への批判から失望に至り、最終的には脱亜論へと傾斜していくと指摘されるのに対し、閻報告は、むしろ清国の実情への批判から転じて清国人の覚醒、そして興亜論に至る新たな視点を提示した。

第2報告は、王媛会員（多摩大学）「隋唐代中国の外国人僧侶像からみる文化交流のあり方」であり、華夷秩序を前提とした隋唐代中国において周辺諸地域から流入した外国人僧侶がどのように認識されたのかを分析した。そして、「胡僧」と称される西域からの仏僧が「いかがわしい存在」として見られていたのに対し、日本からの仏僧は「君子」として本来の正しい僧侶というイメージが付与され、インドの仏僧よりも高い評価を得ていたことが指摘された。

第3報告は、中川拓哉会員（名古屋大学）「戦時下の日独文化交流―日独合作映画『國民の誓』を例に」であり、1930年代に日本文化を対外的に発信する目的で制作された「国際映画」の特徴をナチス・ドイツとの関係から分析した。特に1938年に公開された『國民の誓』の検討を通して、日独の友好関係、両国民の親愛感情の醸

成という狙いがあった一方で、人種主義などナチスのイデオロギーに対する警戒感から、映画においてナチズムは徹底的に排除されていたことを明らかにした。

以上3報告に対して、フロアを含めた活発な議論が行われた。閻報告に対しては、岡千仞を文化運搬者として捉えることについて、その国際文化学的意義を明確化する必要性が指摘された。王報告に対しては、「華夷秩序」概念を非歴史的な前提とするのではなく、むしろ本報告のような検討作業を通じて「華夷秩序」論を脱構築していく可能性が提議された。中川報告に対しては、「国際映画」をめぐる日本の国際文化組織の制度的変遷だけでなく、個々の作品の具体的かつ詳細な分析作業が必要である点が指摘された。

本セッションの3報告は、それぞれ対象とする時代、地域、文化交流のアクターを異にしており、国際文化交流研究の多様化を印象付けるものであった。言い換えれば、従来の研究の多くが近代に限定され、西洋との比較においてなされ、また国家の政策や事業という観点から行われてきたことを想起するならば、3報告はいずれも近年の国際文化交流研究の着実な発展を代表するものであると言えよう。

【自由論題C】
文学から見る文化と思想

菅野敦志（司会）、王佳超、島貫悟、菅野敦志、高橋梓

本セッションでは「文学から見る文化と思想」をテーマとして4つの報告がなされた。

第1報告は、王佳超会員（龍谷大学大学院生）「梁啓超と「今文学」運動―清代学術思想の流れについて―」であった。同報告では、梁啓超の早期の経歴と日本に対する認識、亡命時期の思想変容の検証を通じて、梁が有していた思想が検討された。結論として、梁啓超が保持していた「進歩」史観は、来日以前にすでにある程度の形をそなえていたと確認できることから、それが日本滞在中の西洋思想を受容するうえでの原点として考えられる点が述べられた。

第2報告は、島貫悟会員（東北大学大学院生）「ウィリアム・モリスと「社会主義の宗教」―柳宗悦の民藝思想との比較に向けて―」であった。同報告では、モリスと柳の2人が分析対象としてとりあげられ、比較思想史的観点から両者の思想の共通点と差異が論じられた。その際、モリスと宗教との関わりについて詳細な検討がなされ、工芸論と宗教思想のつながりという観点が、工芸の分野を通じた異文化理解の深化を可能にする点が指摘された。

第3報告は、菅野敦志会員（名桜大学）「1980年代中国における「ハイク・ムーブメント」」であった。同報告では、1985年に北米俳句協会の中心人物であるエリザベス・サール・ラムが中国で発表した、北米でのハイク（＝英語俳句）紹介記事を端緒として開始をみた1980年代以降の民間レベルでの「ハイク・ムーブメント」の全容が明らかにされた。ラムと40数名もの中国人読者との文通は、最終的にラムを含む北米俳人によるハイク集の中国における訳書出版という成果を残したのであったが、結論として、文化交流にかかわる研究では、二国間では見落としがちとなるインターカルチュラルな交流の動態に着目すべき点が指摘された。

第4報告は、高橋梓会員（近畿大学）「堀辰雄『大和路・信濃路』の半跏思惟像の表象に見る普遍文化的特性―マルセル・プルースト受容との関連において―」であった。同報告では、堀辰雄が紀行文『大和路・信濃路』で描いた半跏思惟像の文化的特性について、フランス人作家マルセル・プルーストとの関連で考察がなされた。『大和路・信濃路』にはプルーストからの直接的な影響は見られないものの、堀の1930年代のプルースト批評で重視される「感覚」「植物」というテーマとの繋がりが確認できる点や、写実主義的描写を乗り越える手法を学んだ点などが指摘された。結論として、『大和路・信濃路』においては植物に囲まれた半跏思惟像を身体感覚に基づいて鑑賞することで、仏教芸術を個別文化から解き放つことが試みられたとの見解が示された。

上記の4報告はともに、人物と文学を介した文化の伝播と受容が多様な交流を生み出し、個別的な様相をみせながらも確実にその成果を結実させていった事例を丁寧に検証するものであった。これら若手研究者を中心とした意欲的な研究が今後さらなる深化を遂げ、文化と思想をめぐる新たな理解の扉が開かれていくことを期待したい。

【自由論題D】
歴史を記憶し現代に生かす試み

倉真一（司会）、太田哲、
藤田賀久、葉柳和則、山口祐香

本セッションでは、発表予定であった山口祐香会員が西日本豪雨による交通遅延のため残念ながら出席が叶わず、以下の3つの報告が行われた。

第1報告「インパール作戦における旧帝国陸軍との接触の記憶と語り継ぎ－インド北東部ナガの事例」（太田哲会員）では、旧日本軍によるウ号作戦（通称インパール作戦）で連合国軍との主要な戦闘地域となった山岳地帯に居住する「ナガ」という民族集団の人々の間で、戦闘がどのように記憶され語り継がれているのか、それらを記録していく必要性を出発点とした現地調査の報告が行われた。

第2報告「藤澤湘南地域の戦争を振り返る－アクティブラーニングと地域連携を通じた新たな歴史遺産創造の可能性」（藤田賀久会員）では、多摩大学グローバルスタディーズ学部における地域の近代・戦争遺跡を発掘するプロジェクト実践の持つ可能性と課題について、ス

タディーツアーによる学生のグローバルな学びと地域の戦争遺構の調査などを通じた地域連携を題材に、「グローカリティ」の観点から考察がなされた。

第3報告「スイスのラジオ戦争－J. R. フォン・ザーリスのニュース番組「世界クロニクル」を軸に－」（葉柳和則会員）は、第二次世界大戦期のヨーロッパにおけるラジオを武器としたプロパガンダ戦に関して、中立国スイスの国営ラジオ局ベロミュンスターで放送されていた週刊ニュース「世界クロニクル」とそのライター兼キャスターであったJ. R. フォン・ザーリス（チューリッヒ工科大学の歴史学教授）に焦点を当てることで、「RRG（独）対 BBC（英）」という図式で語られてきた従来のプロパガンダ戦の構図の描き直しを迫るものであった。

ここで各報告の詳細に踏み込む紙幅はないが、三報告とも偶然（！）にも戦争（第二次世界大戦）にかかわる歴史や記憶に関する報告であった。戦争の歴史は「敵／見方」「勝者／敗者」といった二項対立で語られやすく、その語りは「国民」「国家」という主体を呼び寄せがちである。三者に共通する志向は、こうした二項対立の語りに回収しきれない記憶や主体にむしろ焦点を当てようとする点にあるだろう（例えば、太田報告の「ナガ」、藤田報告の「台湾人少年工」、葉柳報告の「世界クロニクル」）。

その意味で、三報告が第二次世界大戦の歴史と記憶を取り上げたことの必然性あるいは現在性をむしろ指摘できるだろう。近年、新たな史料の公開や発見が相次ぐ一方、当時を生きた人々は高齢化また他界しつつある。そのなかで従来の歴史の語りから零れ落ちてしまう記憶をいかに「記録」し、「発掘」し、「描き直す」し、そして現代に活かすのか。

質疑応答を含めて司会として感じた可能性や課題をもってまとめに代えたい。一つは、記憶を記録する、発掘する、描き直す営み自体、越境的な交流のなかで営まれる様々な主体による協働作業としての側面を持つことの可能性。二つは、記憶や遺産の持つ生々しい物質性や身体性といったものに…例えば、教会の鐘や漁に再利用される砲弾、空腹として記憶される望郷、防空壕の手掘りの痕、ラジオの声色や視聴者からの手紙に、どう向き合いそこから何を伝えうるのかという課題。報告者および学生たちの真摯な取り組みの今後の展開に期待したい。

【自由論題E】
画像・映像による文化理解

安田震一（司会）、原友理枝、
深松亮太、マスキオ・パオラ、閔愛善

自由論題Eの大きな枠組みは「画像・映像による文化理解」とし、各発表に関してはさらに詳細なキーワードにもとづいた内容であった。ここでは、発表者のレジュメを引用しながら紹介することにする。

原友理枝の「タルコフスキー映画『鏡』は自伝であるのか－「映像のナラトロジー」で読み解く作品構造」の報告では、発表者が着目している点は「詩的表現手法」であった。すなわち、観客が「物」の映像を関連させて内容の意味の展開にむすびつけ、それはつまり観客に物語を語らせる手法である。一般的に自伝は、作者が主人公である自分を語るものであると考えられる。その自分を語る行為を、観客に行わせていることを明らかにすることが研究の主な内容であった。

次に深松亮太の「風刺画描写における表現様式の模倣と応用 －Review of Reviews とアメリカ合衆国諸誌にみられる風刺画家の「知」の交流－」では、政治・社会・経済をめぐるイギリス、アメリカ、オーストラリアの3ヵ国の結びつきが文化面において如何なる交流関係にあったのかを描かれた風刺画を通して相互影響的な関係を検討することが主な内容であった。表現様式という「知」がグローバルな交流のなかで確立していった諸相に迫ることができる内容であった。

さらにマスキオ・パオラの「近世の娯楽の文化における天正カルタ－近世初期風俗画を中心に」の発表では、戦国時代にポルトガルから伝達した天正カルタは娯楽の文化の拡大によって17世紀に日本で発展したことに触れた。近世風俗画を現実としてみるのではなく、そこに描かれている天正カルタのイメージを読み解くことで、天正が日本の娯楽の文化においてどのように受容されたかを考察することが主な内容であった。18世紀の数多くの文献にカルタが言及されているため、その普及が17世紀から18世紀にかけて拡大していくと確認し、絵画の中で描かれなくなるのは、そのイメージが変容したからであると考えられる。

最後に閔愛善の「日本映画界における鈴木清順－見世物としての『アクション映画』」の発表がなされた。本発表では鈴木清順（1923-2017）監督の作品を取り上げ、「職人」として知られる映画監督が作品をなぜ「見世物」と言っていたのかを検証しながら、監督としての立ち位置、映画界に与えた意義を再考する内容であった。

それぞれの発表は、時代および社会背景は異なるが、画像・映像資料を分析し、そこで得られる情報の類似性または違いについて広く言及した。当時の社会や時代を反映している内容や、または時代を先取りしている表現方法などについても分析がなされ、いずれもが異なる視点から検証されていた。表現方法についても興味深い考察がみられた。

こうした発表には、筆者の研究課題である18－19世紀、中国および東南アジアの記録画と類似している点が多く、とりわけ映像・画像に見られる「様子」が自己や他者の経験から作られることが伺える。そして、その様子を繰り返し活用することで鑑賞者や閲覧者の脳裏にその場面が植えつけることができ、そのプロセスを経て実際に訪れたことのない地域であったとしても、いつの間にかその地域を訪れたと勘違いするようになる。このプロ

セスによってある地域が馴染みやすくなる利点が19世紀の植民地主義の時代に行われていた。

本部会は、若手研究者の今後の研究成果が期待できる内容であった。

【自由論題F】ツーリズムの創出と可能性

太田哲（司会）、斉藤理、デラコルダ川島ティンカ、堂下恵、韓準祐

本セッションでは「ツーリズムの創出と可能性」というテーマで4つの発表がなされた。第1報告は斉藤理会員（山口県立大学）が「大学生が観光まちづくりに参画するSTU-RISMプランニング手法について」というタイトルで行った。STU-RISM（StudentとTourismの合成語）という新たな手法を提起し、学生が地域住民と観光来訪者の触媒となり観光を通して三者が「学び」の経験をし、互酬性・互恵性の仕組みの可能性を提示した。発表では大学の授業との関わりや、教員の役割など実践的な部分においても触れており教育面においても参考となる内容が含まれていた。

第2報告においてデラコルダ川島ティンカ会員（広島大学）は「キリスト教関連遺産が観光資源になる時：長崎県平戸島を例に」というタイトルで、平戸島におけるキリシタン関連の有形・無形の遺産について発表した。発表では、「何を以てキリスト教関連遺産とするのか」というRepresentationに対する問題提起を世界遺産申請のプロセスにおいて平戸島での観光資源のプロモーションの変化に注目しながら論じた。

第3報告では堂下恵会員（多摩大学）が「越境する文化や景観の観光利用―イギリス・コーンウォールとメキシコ・イダルゴの事例より」というタイトルで発表を行い、コーンウォールの鉱業に従事する労働者がイダルゴに移住し、鉱業技術の伝承のみならず鉱山関連建造物の建設によってイギリス風の景観を移住先で創り上げた様子を述べた。発表ではコーンウォールの地域食「パスティ」が移住者と共にイダルゴに伝えられ「パステ」として現地化し現地人の間で親しまれる食べ物となったものが、双方の地域の交流を通してコーンウォールにも逆輸入されている事例を伝え、グローバリゼーションにおける新しい視座を提供した。

第4報告は韓準祐会員（多摩大学）から「済州4・3事件をめぐるダークツーリズムに関する試論」というタイトルで行われた。観光において近年光の部分だけではなく、陰の部分にも注目し、それが観光動機につながる点に目を向け、ダークツーリズムとして着目され、研究も活発化している。発表は済州4・3事件を通してダークツーリズムを考察するものだが、4・3事件が韓国国民にとって解釈が分かれる事案であることから4・3事件を扱うダークツーリズムの難しさを理論の検証と共に述べた。

4つの報告はツーリズムという共通のテーマを共有しておりながら、日本、イギリス、メキシコ、韓国と地域も異にし、テーマも多岐にわたっている。しかしながら、4つの報告に通底するものは議論が本質論的に陥るのではなく、様々なエージェント、時代状況などが影響し合いながら変化し、構築され、実践されているものを丁寧に観察し、変化、影響のプロセスを考察したことであり、文化を考える有用な議論の場となった。

【自由論題G】現代アジアへの視座

菅野敦志（司会）、齋藤絢、田中孝枝、中島成久、齋藤大輔

本セッションでは「現代アジアへの視座」をテーマとして4つの報告がなされた。

第1報告は、齋藤絢会員（名古屋外国語大学）「現代韓国社会の民主性についての考察―民衆歌謡歌手の創作現場を通じて―」であった。同報告では、社会運動が活発に展開される現代韓国の社会状況について、民主性をテーマに考察がなされた。結論として、民衆歌謡のテーマには国家による抑圧を受け続けた市民の声が表象されている点や、楽曲や音楽を共有する公共空間にある民主性には、軍事独裁政権時から続く市民の抵抗および民主化を求める持続性がその根源にある点などが指摘された。

第2報告は、田中孝枝会員（多摩大学）「日中観光ビジネスにおけるリスク管理の諸相―中国広州市の日系旅行社を例として―」であった。同報告では、中国広東省広州市のある日系旅行社を事例として、「リスク管理」に焦点をあてて職場の文化を捉える手法が検討された。結論として、中国人スタッフの手配の仕事の特徴やリスク認識は、日本企業の「集団主義」や「形式主義」とは明らかに異なる点が確認できることから、ミクロで流動的なリスク管理の実践の分析こそが、多文化状況にある職場で生じる文化摩擦のメカニズムを明らかにするうえで有益であることが示唆された。

第3報告は、中島成久会員（法政大学）「インドネシアのアブラヤシ農園におけるニアス人労働者―サバルタン論の観点から―」であった。同報告では、西スマトラ州と北スマトラ州でのアブラヤシ農園でのニアス人労働者の実態について、報告者による長年にわたる調査から、なぜ彼らが選好されるのかを焦点にして分析がなされた。フィールドワークに基づく詳細な検証を通じて、貧困や地位の低さなどから、ニアス人労働者の持つ「サバルタン」的特徴が明らかにされた。

第4報告は、齋藤大輔会員（青山学院大学）「現代日本における東南アジア表象―バラエティ番組における分析から―」であった。同報告では、日本（人）との関連性で捉えている地上波民放のバラエティ番組とその内容に着目し、それらの番組内で描き出されている「東南アジア」像が考察された。結論として、東南アジアを舞台・題材とした番組には、「他者としての東南アジア」、「遅れ

れていてほしい東南アジア」といった日本(人)の見る側としての一方的なまなざしと欲望を見出すことができる点などが指摘された。

齋藤絢会員の報告では、若い世代のK-popの歌詞に「民主主義や民主化」が見られることについて、韓国社会における「世代やジャンルを越えて音楽に反映される民主性」への指摘があった。世代を越えた文化的精神性の継承が肯定的に評価される一方で、齋藤大輔会員の報告では、世代が変わっても変化することのない、日本メディアの否定的な東南アジア観が示されており、両者の報告は実に対照的であった。改めて、われわれが持つ「現代アジアへの視座」について考えさせられ、その認識を新たにさせられるセッションであった。

【自由論題H】マイノリティへの視座

山脇千賀子 (司会)、市岡卓、武市一成、照屋理

本セッションでは、以下の3つの報告が行われた。

第1報告は、市岡卓会員による「シンガポールにおける47年ぶりのマレー人大統領の誕生に関する論議について－「マイノリティへの配慮」に対するマイノリティ側の反応－」であった。2017年大統領選挙をめぐる一連の経緯について詳細な解説がされ、2016年に政府が憲法を改定してエスニック・マイノリティである「マレー人への配慮」をしたことが果たして真にマイノリティの差別解消にむすびつくものといえるのかどうか、マレー人社会の反応や国内外の多様な主体間の関係性も含む多角的視点からの分析がされた。

第2報告は、武市一成会員による「日本の多文化社会に見る『音』とナショナリズムの問題－ヘイト・スピーチの現場から」であった。東京都新宿区大久保地域における2013～15年に実施された一般住民と事業主を対象とした聞き取り調査において表明されたコリアンの声などの「音」が喚起する「感覚上の嫌悪」の事例を分析し、現行の「ヘイト・スピーチ規制」が文化的ナショナリズムに構造的に依存しており、地域社会における日本人と外国人住民の権力関係に根本的変化をもたらさないのではないか、という問題提起がされた。

第3報告は、照屋理会員による「『台湾日日新報』にみる沖縄県系人の文芸活動」であった。『台湾日日新報』(1898～1944年)において実名およびペンネームで短歌や俳句などの作品を発表している沖縄県系人のバックグラウンドを丹念に調査し、同時代の雑誌と比較分析すると、幅広い社会階層の人々が新聞紙上で文芸活動の発信をしていることが明らかにされた。同時に、沖縄・台湾・日本の間で揺れ動く沖縄県系人の心情を描き出す作品も紹介された。

それぞれの報告は、社会におけるマイノリティに注目するテーマが設定されていたが、インターカルチュラル・スタディーズとして取り組まれる研究手法の多様性を示唆するセッションとなった。司会者の視点からは、それぞれの報告に関して比較分析の事例が思い浮かび、今後の研究の深化の余地を大いに感じさせられた。

【自由論題I】理論的考察

牧田東一(司会)、大山貴稔、小島望、細谷功、石川孝樹

自由論題I「理論的考察」では、ある意味非常に多様性に富んだ発表が行われた。国際関係論の理論的考察に分類できると思われるのは、大山貴稔会員の「戦後日本における『国益』概念の淵源－"national interest"の需要をめぐる翻訳論的考察」と題する発表、および小島望会員の「人類史上1%未満の国民国家?－アザー・ガットとシニシャ・マレシェヴィッチの所説をめぐって」であった。大山会員は英語のnational interestがどのように日本の国際政治学界で翻訳されたのかという点に加えて、次第にその定訳となった「国益」が国会でどのような意味で用いられたかを丁寧な実証研究で示した。National interestが英語の意味においては、外交においてパワーバランスの中で追及可能な最大の利益という意味であったが、その訳語である「国益」が、ある時期からは追及可能性という限定なしの最大利益というように「再解釈」されてきた過程、およびもはや本来の意味を誰も問わずに「国益」が使われている現状を批判的に分析している。

小島会員の研究テーマは、これも国際関係論の極めて基礎的な概念である「国民国家」とは何かという問題である。国民国家を近代的な国民概念でとらえる思想と民族国家としてとらえる思想の対立を示し、両者がどの部分で異なり、それがどのような意味をもたらすのかを分析している。国益も国民国家も国際関係論の教科書の最初に出てくるような基本概念であるが、最も基礎的、根本的な部分において、日本の国際関係論がなおざりにしている課題が示された。

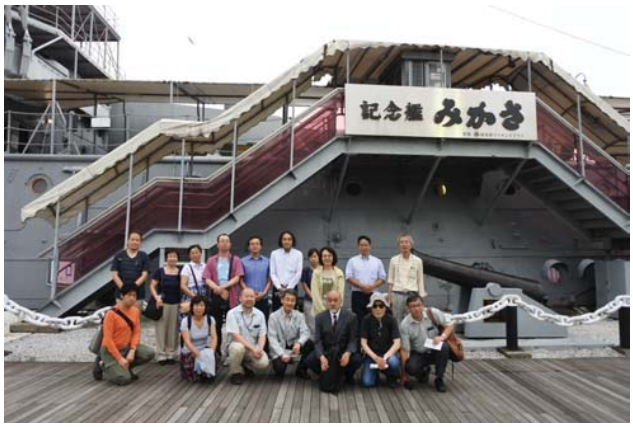
細谷会員の「DoubRing:異文化の思考回路の多様性を定量化・可視化するための方法論」と題する発表は多文化状況での価値観の多様性を定量的に測定する手法として、DoubRingを紹介し、実証研究の事例を示した。多文化状況の研究に一石を投じる方法論的貢献であると思われる。

石川会員の「市民の生存保障と換骨奪胎策の国際交流事業－ある行政職員(故人)の事業足跡から」は、会員自身が勤務していた横浜市の国際交流事業を中心的に企画運営してきたある市役所職員の国際交流事業の意義づけ、自治体行政における位置づけをめぐる理論的な考察である。自治体の国際政策については、首長の思想等と結びつけられて考察されることが多いが、自治体職員(公務員)に目を向ける研究は少なく、新しい分野を示したと言えよう。

4件の発表は多様であったが、いずれも国際文化学会でしか発表できないという内容であり、国際文化学会の存在意義を示していると言えよう。

エクスカージョンのご報告

藤田 賀久　（多摩大学）



記念艦「みかさ」にて記念写真

ヴェルニー記念館内の
3トンスチームハンマー

三浦按針夫妻の供養塔（塚山公園）

浄土寺で逸見ご住職の解説

7月6日（金）、神奈川県横須賀市を舞台に、恒例のエクスカージョンを実施しました。昨年の宮崎大会に引き続き、今大会も天候に恵まれず、西日本を襲った豪雨の影響が心配されましたが、当日は幸運にも雨が止み、全行程を無事終えることができました。

17名の参加者は京急横須賀中央駅に集合後、ヴェルニー記念館を訪れました。ヴェルニー（1837～1908年）は幕末に来日したフランス人技師であり、横須賀製鉄所の設置（1865年）に大きく貢献しました。主要機材はオランダ製のスチームハンマー6機、このうちヴェルニー記念館には現存する2機が展示されています。館内では、19世紀日本がウェスタンインパクトに直面した緊張感と、近代化へ向けた躍動感を感じることができました。なお、3トンハンマーは1996年まで在日米軍横須賀基地の艦船修理廠で使われていました。

次に軍港巡りの船に乗船しました。横須賀は、横須賀製鉄所を発端として横須賀海軍工廠や横須賀鎮守府が置かれた日本海軍の要でした。戦後は海上自衛隊基地（横須賀地方隊）と在日米軍横須賀基地となり、米海軍空母「ロナルド・レーガン」の母港として知られています。この日は不在でしたが、2015年に就航した海上自衛隊ヘリコプター搭載護衛艦「いずも」の巨大な姿を船上から眺めました。

下船後に向かったのは三浦按針（ウィリアム・アダムス、1564～1620年）ゆかりの地です。1600年、現在の大分県臼杵にオランダ商船「リーフデ号」で漂着したイギリス人アダムスは、徳川家康の外交顧問となり、横須賀市逸見に領地を与えられました。横須賀の街を見下ろす塚山公園で按針夫妻の供養塔を訪ねた後、菩提寺である浄土寺へ向かいました。ここでは、ご住職の逸見道郎氏の解説を頂き、特別に按針ゆかりの貴重な品々を拝観させていただきました。

最後の訪問地は記念艦「みかさ」でした。1902年に英国ヴィッカーズ造船所で建造されて直ちに横須賀に回航、日露戦争では連合艦隊旗艦として活躍しました。特に1905年5月27～28日に対馬沖でバルチック艦隊を迎え撃った「日本海海戦」での功績はあまりにも有名です。

東洋と西洋との邂逅、近代国家への歩み、そして戦後日本の基軸となっている日米同盟。このように、世界史の文脈から日本の歩みを再確認する意味において、横須賀は日本国際文化学会のエクスカージョンとして、また「知の再武装――人は何をするべきか」という年次大会のテーマを考える上においても、非常にふさわしい場所でした。

本エクスカージョンの実施に際しては、企画段階から横須賀市国際交流課の全面的なご協力を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。また、横須賀市は三浦按針ゆかりの大分県臼杵市、静岡県伊東市、長崎県平戸市と4市でANJINプロジェクト連絡協議会を構成しています。

今回の「国際文化学会　若手研究者紹介」のコーナーには、高橋梓氏（近畿大学）と目黒志帆美氏（石巻専修大学）にご寄稿を頂きました。

国際文化学が意味づける研究と教育

高橋 梓（近畿大学）

私は東北大学大学院国際文化研究科で博士課程を過ごしました。しかし当時は「フランス文学を研究している」という意識を持っており、「国際文化」については深く考えたことがありませんでした。近畿大学に就職した2016年、自分のルーツであるはずの「国際文化」とは何なのかという疑問が生じ、日本国際文化学会に入会しました。

当時、私は「学際的＝国際文化」だと思っていましたが、早稲田大学での第15回全国大会の発表やシンポジウムを聞き、自分の認識が改められることとなりました。国際文化学とは、今の日本を生きる我々が直面している国際的な課題に対し、様々な「文化」をキーワードとして議論を試みる、極めてアクチュアルな学問だということに気づいたのです。

私はすぐに平野健一郎先生の『国際文化論』を購入して熟読し、巻末の文献情報を頼りに読書に没頭しました。その過程で「堀辰雄のマルセル・プルースト受容」という自身の研究課題を再解釈することになります。2016年は排他主義や自国第一主義が話題となった年であり、アクチュアルな問題関心がエネルギーとなったのでしょう。異文化圏の作家であるプルーストを読んだ堀は、自文化に対する意識をどのように変化させたのだろうか。異文化との接触により、個人の自文化の解釈はどう変化するのだろうか――このような問いに直面した私は、東北大国際文化研究科の学友たちに声をかけ、2017年の第16回全国大会で共通論題「国を意識するとき――文化的越境性から考える伝統、民族、経済――」をコーディネートしました。翌年の2018年の第17回大会には自由論題で報告を行いましたが、まだまだ調べたいことが残っています。今後も自由論題や共通論題での報告を続けるつもりです。

日本国際文化学会での研究成果は、すぐに近畿大学の講義「国際化と異文化理解」に反映させています。講義を受けた学生たちの反応から、新たな知見を思いつくことも少なくありません。社会を生きる上で意識せざるを得ない国際問題を文化によって切り開いていく国際文化学は、若い学生たちと相性がいいのだと考えております。その意味では、日本国際文化学会には学部生の自由な発想をくみ上げ、議論できるような空間として、さらに門戸を広げていただきたいと思っております。各地域に支部組織ができ、学部生や院生が積極的に研究発表や論文投稿を行う場ができると、学会に一層の厚みができるのではないでしょうか。

最後になりましたが、自分が研究者・教育者として生きる上で、日本国際文化学会から受けた学びは計り知れません。この恩を返すためにも、さらに学びを深めるとともに、いつかは学会を運営する側に回り、国際文化学の振興に努めたいと願っております。

年会費納入のお願い

機関紙刊行や学会運営に支障をきたしますので2018年度の会費を未納の方は速やかにお振込をお願い致します。

ゆうちょ銀行　00210－2－138408
日本国際文化学会

国際文化学会　若手研究者紹介

目黒志帆美氏（石巻専修大学助教）は、第8回平野健一郎賞を受賞され、第17回の全国大会において表彰式が行われました。受賞論文は「ハワイ王国に写し出されるアメリカ―マーク・トウェインの『ハワイ通信』にみる「自国認識」」です。

目黒 志帆美　（石巻専修大学）

第8回平野健一郎賞の受賞式

このたびは平野健一郎賞という大変名誉ある賞をいただき、光栄に思っております。対象となった論文「ハワイ王国に写し出されるアメリカ－マーク・トウェインの『ハワイ通信』にみる『自国認識』」は、ハワイ史研究者の立場から、フィクション性を包含したマーク・トウェインのハワイでの滞在記録を分析し、そこから19世紀後半のアメリカ人の自国に対するナショナル・アイデンティティを明らかにする、という目的のもと取り組んだ研究成果です。文学と歴史との連続性はこれまでに多くの研究者が指摘してきたため、この構想自体は目新しいものではないはずです。しかし、ハワイ史研究においてはまだそのような分析視覚を用いた研究はなされていません。従来アメリカ文学の枠内でのみ検証されてきたトウェインの作品を、ハワイ史の資料として扱うという新たな試みを評価していただけたことは、この上ない喜びです。

本学会の魅力は、今年7月に開催された大会の活況が物語っているとおり、異分野の研究者がそれぞれの立場から「文化」を捉え、お互いに「国際文化」とは何かを議論・探求するところにあると考えています。実は、去年の論文の構想段階では、トウェインの『ハワイ通信』にみられるフィクション部分を論文の中でどのように取り扱うかということに関して、悩んでいました。しかし、去年の宮崎公立大学で開催された学会大会で報告させていただいた際、佐賀大学の木原誠先生より、「フィクション性こそが面白い部分なのではないか」というご意見を頂戴したことが、フィクション性に踏み込んだ研究に挑戦する直接的なきっかけとなりました。日本国際文化学会という議論の空間が私を育ててくださっていることに、あらためて感謝しています。

私の母校である東北大学大学院国際文化研究科は、その名があらわすとおり、「国際文化」とは何かを追求する場です。元東北大学大学院国際文化研究科長で元日本国際文化学会会長であった小林文生先生のご指導を受けてきた私たちは、院生を中心とした研究会「東北大学国際文化研究会＜稲穂会＞」を2017年秋に発足し、定期的に院生や修了生などが集い、「国際文化」とは何かを探るべく、それぞれの専門の立場から活発な議論を展開しています。この研究会はまだ小さな組織ではありますが、将来的には日本国際文化学会と何かの形で連携できるようになればと願っています。

恥ずかしながら、私自身はまだ「国際文化」とは何か、という問いに対してはっきりとした答えが出せていません。わからないからこそ追求したい、そのような思いで研究に取り組んでいるところです。まだまだ研究者として未熟な人間ですが、今後ともみなさまのご指導、ご鞭撻をいただけますと幸いです。

事務局からのお知らせ

【研究会募集のお知らせ】

研究会活動の企画運営にご活用ください。
・申請金額：10万円まで（１～２件程度）
・申請締め切り：随時
・申請方法：学会ホームページより様式をダウンロードし、学会事務局宛に提出（メール添付あるいは郵送で）。
・結果の通知：直近の常任理事会で決定し、結果をお知らせします。
・研究会の実施期間：2019年３月末まで。
・研究会実施については以下の３点を条件とします。
　－共催として「日本国際文化学会」を明記する。
　－学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合は、そこに学会メンバーも参加をするプログラム（報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論等、様式は自由）を用意する。
　－開催前に学会ホームページおよびニューズレターの研究会開催コーナーにおいて周知することを了承いただき、また、開催後１か月以内に400～800字程度の報告書を提出して、これを学会ホームページおよびニューズレターで報告することとする。

【年報『インターカルチュラル』博士論文紹介記事の投稿を募集しています】

博士の学位を投稿締切日までに取得ないし取得確定したことを申告する会員は、年報『インターカルチュラル』の博士論文紹介欄にその要約を発表することができます。入会申し込みと同時に投稿することもできます。ご応募お待ちしております。

なお、投稿原稿の書式は次の通りです。

①　会員氏名（英字表記を並記する）
②　専門分野・研究機関（在籍のとき）
③　博士論文表題
④　論文提出先ならびに提出年月日
⑤　博士号取得ないし取得確定した年月日
⑥　論文概要　日本語で2,000字～2,150字（本誌２頁）の範囲でまとめてください。
但し本誌のページ割りの都合で文字数の調整をお願いすることがあります。

ワープロソフトはワード等の一般的なものを使用してください。
・投稿締切日：2018年12月30日（必着）　著者による初校・再校を実施します。
・掲載誌発刊：2019年3月
・投稿原稿送信先：年報編集委員会あて　intercultural2019@gmail.com

全国大会に携わった本学部の教職員及び学生達

今回の全国大会は神奈川県藤沢市の多摩大学湘南キャンパスで開催されました。今年度は例年以上に多くの共通論題および自由論題のセッションが開かれ、会員をはじめとした研究者、学生、ならびに一般の方など沢山の方が参加され、活気にあふれました。「国際文化」に関する間口は広く、歴史から現代の社会現象に至るまで様々な形で「知の再武装」が求められているのを実感しました。

このニューズレターが皆様に届く頃は、あの熱く燃えた夏の全国大会の余韻が徐々にさめていくように涼しくなっていると見受けます。秋学期のご講義やご校務などでお忙しい日々が続くかと存じますが、なにとぞご自愛くださいませ。また来年の全国大会でお会いするのを楽しみにしております。【学会事務局：大場】